

死後の世界 第二部 人は死んだら、どこへ行くのか  
第1章 肉体の死後、人の霊魂はどこへ行くのか

この学び全体のアウトライン

第一部 死とは何か

- 第1章 人の構造
- 第2章 死についての聖書的理解
- 第3章 非物質的部分【霊魂】の不滅

第二部 人は死んだら、どこへ行くのか

- 第1章 肉体の死後、人の霊魂はどこへ行くのか
- 第2章 復活までの中間的状态

第三部 死者の復活

- 第1章 教会の携挙【新約時代の信者の復活】
- 第2章 大患難期の後の75日間【旧約時代の信者と大患難期の殉教者たちの復活】
- 第3章 メシアの王国【信者は肉体の死を経ずに全員が変換】
- 第4章 王国の後【不信者の（第二の）復活、不信者は第二の死へ】

第四部 新しい天と新しい地での永遠の生活

前回までの内容

1. 第一部第1章：人の構造
  - (1) 人は物質的部分である「からだ」と非物質的部分である「霊魂」とから成る
  - (2) 霊魂は、「霊・魂・心・思考・意志・良心」の6つの要素と 墮落によって入り込んだ罪の性質である「肉」、合計7つの要素から成る
2. 第2章：死についての聖書的理解
  - (1) 肉体の死とは、人の非物質的部分である「霊魂」が肉体から分離することである
  - (2) 肉体の死のほか、霊的な死と永遠の死がある
    - ① 霊的な死とは、神からの一時的な分離
    - ② 永遠の死とは、神からの永遠の分離
  - (3) このように聖書が教える死の特徴は、「分離」である。消滅とか、意識がなくなることではない。
  - (4) 死は、罪に対するさばきであり、良いことではない。神は、3つの死のうち2つ、肉体の死と霊的な死については、解決策を用意しておられる。
    - ① 肉体の死については、復活。霊魂が再びからだと結合される。そのときの体は、不死である。信者も不信者も、すべての人がこれを受け取る。
    - ② 霊的な死については、信仰による霊的な再生。神の恵みにより信仰を通して、罪の贖いを受け取ると、人は神の子とされ、神との交わりが回復される。そして、新しい性質がその人の霊魂に与えられ、6つの要素が日々新たにされる。
  - (5) 永遠の死については、解決策はない。不信者は、不死のからだを受け取ったのち、

永遠に神から分離された場所に行くことになる。

### 3. 第3章：霊魂の不滅

肉体の死によってからだから分離した霊魂は、消滅したり、意識がなくなるのではなく、不滅であり、その人の意識は明瞭に継続する。

では、肉体を離れた霊魂はどこに行くのか。これが、本日のテーマである。フルクテンバウム博士の論文「The Place of the Dead (死者の場所)」に基づく。

## 第二部第1章のアウトライン

1. 目に見えない世界を指す用語（本日は、この内容の一部を扱います）
2. 旧約時代における死者の行先
3. メシア昇天以降の現代における死者の行先
4. 将来における死者の行先

■目に見えない世界を指す用語【13語、「地獄」を除いて12の用語は聖書に中にある】

1. シェオル（ヘブル語）＝日本語訳聖書（新改訳）では「よみ」
  - (1) 詩 89：48「いったい、生きていて死を見ない者はだれでしょう。だれがおのれ自身を、シェオルの力から救い出せましょう」 →義人も、そうでない人も共に、シェオルに行かねばならない。
    - ① 聖書において、義人とは神を信じる人、そうでない人とは神を信じない人である。
      - 神の前に立ったとき、自分の行いによって正しいと判定される人は、歴史上、唯一人メシアだけである。
      - メシア以外の人はずべて、神の恵みにより、信仰を通して、救いを受ける。その救いとは、私の罪が神によって備えられた犠牲の上に負わされ、神の義が私に与えられて、私を神の前に正しいと宣言してくださることである。恵みにより、とは、自分の行いによらず、無代価で、ということ。
    - ② 旧約の聖徒たちの行先として・・・創 37：35、42：38、44：29、31、ヨブ 14：13、詩 16：10、ヨナ 2：2
    - ③ 義人ではない人の行先として・・・民 16：30、33、ヨブ 24：19、詩 9：17、49：14、エゼ 32：21
  - (2) ヨブ 24：19、詩 9：17、49：14 → 不信者にとっては恐ろしい場所である
  - (3) 申 32：22「わたしの怒りで火は燃えあがり、よみの底まで燃えて行く」、詩 86：13「それは、あなたの恵みが私に対して大きく、あなたが私のたましいを、よみの深みから救い出してくださったからです」 →下線部を直訳すると「シェオルの最も低いところ」。シェオルの中には高低差がある。
  - (4) 「シェオルに下る」という表現に見るように、方向感覚としては下方である（I

サム 2 : 6、1列 2 : 6、9、ヨブ 7 : 9、11 : 8、17 : 16、21 : 13、詩 30 : 3、箴 5 : 5、7 : 27、15 : 24、イザ 5 : 14、14 : 9、アモ 9 : 2「よみに入り込んでも」、下線部は直訳すると「地面を掘り抜いて行って～に至る」

- (5) シェオルに下った人々には、意識がある (イザ 14 : 9～10、ヨナ 2 : 2)  
 (6) シェオルにも、神の支配は及んでいる (ヨブ 26 : 6、詩 139 : 8)

2. ハデス (ギリシア語) = 日本語訳聖書 (新改訳) では訳さずに「ハデス」と表記

(1) 使徒 2 : 27 「あなたは私のたましいをハデスに捨てておかず」・・・この箇所は旧約聖書の詩 16 : 10 の引用。ヘブル語のシェオルをギリシア語では「ハデス」として訳している。→ シェオルとハデスは、同じ場所を指していて、そこをヘブル語ではシェオル、ギリシア語ではハデスと呼ぶ。

(2) ルカ 16 : 19～31

① 義人のラザロもそうでない金持ちも、ともにハデスに行った → シェオルの (1) と同じく、義人も、そうでない人も、共に、死者の霊魂が行く先、それがハデスであった。使徒 2 : 27 歴史上で唯一人、ご自身の行いで完全に正しい人であったイエスも、十字架上で死んだ後、その霊魂はハデスに行った。

② ハデスの中には、2つの主要区分がある。義人でない人たちのための場所 (狭義のハデス) と、義人たちのための場所 (別名、「アブラハムのふところ」、この用語については後述する) の2つである。

③ 義人でない金持ちは狭義のハデスの中で、苦しんでいた。ハデスは、義人でない人たちにとっては、苦しみの場所である。

④ ハデスの中にいる人々には、意識がある。

(3) マタ 11 : 23、ルカ 10 : 15 「ハデスに落ちる」という表現に見るように、ハデスへの方向感覚は、下方である。

(4) 黙 20 : 14 「死とハデスとは、火の池に投げ込まれた」→ この意味内容については、後述の **9. 火の池** の解説で扱う

3. アバドン (ヘブル語) = 日本語訳「滅びの淵」、英語訳「the Place of Ruin」

(1) アバドンとは、ヘブル語で「滅び」、「破壊」という意味。旧約聖書では 6 回 (ヨブ 26 : 6、28 : 22、31 : 12、詩 88 : 11、箴 15 : 11、27 : 20)。

(2) 新約聖書では 1 回 (黙 9 : 11)。この箇所は、悪霊の呼称として「アバドン」(破壊者) が使用されており、死者の霊魂の行く先の場所としてではない。

(3) 旧約聖書での 6 回は、ヨブ記、詩篇、箴言の 3 つの書である。これら 3 つの書はいずれも詩の文型で書かれている。ヘブル語の詩の特徴は、音の韻を踏むのではなく、並行表現である。並行表現とは、同じことを別の言葉で繰り返して表現することである。6 回のうち、3 回はシェオルと並行して使われている (ヨブ 26 : 6、箴 15 : 11、27 : 20)。よって、シェオルとアバドンとは同じ意味内容を持った言葉である。

(4) アバドンは、肯定的に良いものといったニュアンスで使われることは一度もなく、



必ず否定的で悪しきものといったニュアンスである。

- (5) ③と④を合わせて見ると、アバドンとは、シェオル＝ハデスの中の、苦しみ  
の場所、すなわち義人ではない人たちが行く場所を指す。

#### 4. 旧約聖書の中で、日本語訳「穴」、英語訳「the Pit」

- (1) 旧約聖書のヨブ記、詩篇、箴言、イザヤ書、エゼキエル書には、目に見えない世界を「穴」と表現している箇所がある。使用されるヘブル語はいくつかあるが、代表的なものは2つ、シャクハス と ボウア である。

① □シャクハス：「穴」、特に動物や敵兵を罠にかけるための落とし穴を指す。  
滅び、墓、といった意味もある。

② □ボウア：「穴」、特に貯水槽や牢獄として使う地下の穴を指す。

- (2) イザヤ 38：17「滅びの穴□シャクハスから私のたましいを引き戻された」  
(3) 詩 30：3「あなたは私のたましいをよみ□シェオルから引き上げ、私が穴□ボウアに下って行かないように私を生かしておられました」→ ここも並行表現。シェオルと同じ意味内容の言葉として使われている。この箇所のほかにも、シェオルと並行表現するのは、箴 1：12、イザ 38：18。  
(4) エゼキエル書には、「穴□ボウアに下る者」という表現が多く使われている（26：20、31：14、16、32：18、24、25、29、30）  
(5) これらの箇所から、「穴」という表現は、シェオル＝ハデスの中の、苦しみ  
の場所、すなわち義人ではない人たちが行く場所を指す。ヘブル語のアバドンは、その場所の呼び名であるのに対して、「穴」というのはその場所の形態を説明することばとして使用されている。アバドンも「穴」も共に、同じ場所を指している。

シェオルはヘブル語、ハデスはギリシア語で、同じ場所を指す。  
その中には、義人が行く場所と、義人でない人たちが行く場所がある。  
義人でない人たちが行く場所を、ヘブル語ではアバドンと呼び、「穴」とも表現する。

